



TITLE:

静脩 Vol. 40 No. 3 (2004.1) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 40 No. 3 (2004.1) [全文]. 静脩 2004, 40(3)

ISSUE DATE:

2004-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66048>

RIGHT:



## 電子ジャーナルの利用について 「社会健康医学系専攻」からのリクエスト

医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野 助教授 中山 健夫

「電子ジャーナルの利用について」というテーマで編集委員会から寄稿依頼を頂きました。

一ユーザーとしては、ここ数年で飛躍的に図書館の情報環境が充実してきたことを素直に喜んでいます。私の所属する社会健康医学系専攻は、医学研究科内に平成12年度に設置された新しい大学院で、一橋大学大学院国際企業戦略研究科（いわゆるMBAコース）と共に国立大学初の「専門大学院」として発足しました。既に誕生から3年半が経ったとは言え、まだまだ若い専攻で、京都大学という大きな組織から見ると、まだ余り多くの方々に知られてはいない存在でしょう。この機会を利用して、まず本専攻を簡単にご紹介させて頂ければと思います。院生さんを対象に、図書館サービスへの要望についてアンケート調査を致しましたので、その結果を報告して図書館のさらなる発展に向けてエールを送れば、と考えています。

「専門大学院」についてですが、これは「高度専門職業人の養成に特化した実践的な教育を行う大学院修士課程」とされています。その目的に即した教育研究環境を確保するために、従来の大学院修士課程とは異なる次の特色を持っています。

・教員組織（従来の2倍、相当数の実務経験者

が必要）

- ・カリキュラムや授業方法（ケーススタディ、演習、フィールドワーク、インターンシップ等）
- ・修了要件（論文に代え



て特定の課題についての研究の成果を審査）

実務経験者の要件は、本専攻では臨床経験のある医師も多いので、実務と研究とクリアに2分されるわけではない（両方している人が多い）ですが、生物統計学の領域では製薬会社に勤務されていた先生方がいらっしゃいます。「専門大学院」は修士課程が相当しますが、本専攻は当初から博士課程も併置して、他の専攻と同様に研究者養成も行っています。さらに2003年度からは「専門職大学院」の一つに位置づけられました。「専門職大学院」は法科大学院への社会的な関心の高まりと共に、その名前を大学関係の多くの方々が耳にされていることと思います。「専門職大学院」の趣旨はほとんど「専門大学院」と同じですが、2003年施行の改正学校教育法によって始まった新しい制度である点が違うと言えるでしょう。「専門職大学院」はアメリカのロースクール、ビジネススクール、メディカルスクールなどのプロフェッショナルス

クールをモデルとしています。

社会健康医学系専攻の英文名は "School of Public Health"であり、パブリック・ヘルス領域の専門職大学院となります。従来、大学におけるPublic Healthの研究は医学部の中の一教室（「公衆衛生学」の名称で）として行なわれていました。欧米では、大学院過程に相当してSchool of Medicine（医学部）とSchool of Public Health（公衆衛生学部）が並列して運営されていることから見ても、これまでの日本におけるパブリック・ヘルスの研究・教育体制の不十分さは明らかでした。社会における医学・医療をめぐるさまざまな今日的な課題に取り組んでいくために、より規模の大きい、充実した研究・教育システムの必要性が高まり、本専攻の設置への機運が高まったと言えるでしょう。開設当時から名称変更のあった分野もいくつかありますが、現在は協力講座も含めて次の6講座16分野で構成されています。

健康解析学...医療統計学、医療疫学、薬剤疫学、ゲノム疫学

健康管理学...医療経済学、医療倫理学、健康情報学、疫学研究情報管理学（協力分野）

健康要因学...環境衛生学、健康増進・行動学、予防医療学(保健管理センター・協力分野)

国際保健学...社会疫学、健康政策・国際保健学  
社会生態学（協力講座）...環境生態学（東南アジア研究センター）、人間生態学（同左）

特別コース...知的財団経営学（産学連携オフィス）

入学される学生さんは、医師・歯科医師、薬剤師、看護師だけではなく、弁護士さんや地裁判事を勤められた方、大手新聞社の元論説委員、学校のベテラン教員といった方々から、大学を卒業してすぐに大学院に入学される方もいて、本当にそのバックグラウンドは多彩です。学内の他の専攻系は知らないのですが、きっと最もバラエティーに富んだ、良い意味で変わった集団と言えるでしょう。現在、修士課程が各学年22名、博士課程11名、卒業生も合わせれば100名を超える学生さんが籍を置いていることになります。縁あって本専攻に来られた方々が、所期の目的を達して、それぞれの立場で問題に取り組み、医療を含むパブリック・ヘルスの向上に貢献していかれることを心から祈り、一教官として応援している次第です。

さて本稿の執筆にあたり、専攻の皆さんに図書館の利用状況について簡単なアンケートをさせて頂きました。内容は電子ジャーナルに限りませんが、今後の図書館サービスの充実に向けて何かの参考になれば幸いです。

調査期間： 2003年12月1日～4日

方法：電子メールで連絡可能な本専攻修士・博士課程在学者（正確な分母は不明ですが推測で40-50名）

回答数：21名

## 図書館利用状況アンケート

回答数21（カッコ内パーセント）

	3 ほぼ毎日	2 2～4日くらい	1 ほとんど見なかった
(1) この1カ月間、図書館のホームページは平均して週にどれくらい見られましたか？	4 (19)	15 (71)	2 (10)
(2) オンラインのデータベースのうち、よく使うものは？			
1 : PubMed (医学図書館経由)	6 (29)	12 (57)	3 (14)
2 : PubMed (医学図書館を経由しない)	5 (24)	6 (28)	10 (48)
3 : CochraneLibrary (医学図書館経由)	0	4 (19)	17 (81)
4 : Web of Science (医学図書館経由)	1 (5)	6 (28)	14 (67)
5 : Journal of Citation Reports (医学図書館経由)	0	7 (33)	14 (67)

6：他（具体的にご記入下さい）	医中誌 science direct interscience wiley 医学中央雑誌・WebSPIRS PubMedで検索したページから、京大マークでオンラインジャーナルを取り寄せているが、時々選択したページと異なったページが出てきてしまう場合があり、改善を望んでいる。			
7：今後、利用したいデータベースがあれば記入してください。	あまり大学構内におりませんので、学外からのアクセスを可能にさせていただきたいと思います。 UpToDateは必須です。ぜひ図書館経由で利用できるようにしてください。個人で買うのは高いです。 どうも社会健康の人たちは一部心理に片寄っているの、心理系のjournalのデータベースも医学図書館経由で利用できるようになると貸借時のトラブルが減るのでは無いでしょうか？ SciFinder EMBASE			
(3) オンラインジャーナルは週にどれくらい使うか？	3 ほぼ毎日	2 2～5日くらい	1 ほとんど使わない(1日以下)	
	8 (38)	13 (62)	0	
(4) 利用可能なオンラインジャーナルはすぐに分かりますか？	4 だいたい分かる	3 時々、わからない	2 分からない 時が多い	1 使うことがないので、答えられない
	11 (52)	8 (38)	2 (10)	0
(5) 利用可能なオンラインジャーナルの満足度はどれくらいですか？	4 満足している	3 だいたい満足しているが、不満な部分も多い	2 不満が多い	1 使うことがないので、答えられない
	0	17 (81)	3 (14)	1 (5)
(6) 現在提供されているものの他に、利用したいオンラインジャーナルがあればご記入下さい。 (実際に図書館で提供されているか否か確認は不要です)	Annual Review of Public Health Tobacco Control Statistical Methods in Medical Research environmental toxicology and chemistry アレルギー・免疫 図書館のサービス自体（職員の対応）には問題がないが、利用できるオンラインジャーナル（特に生物系）が意外と少ない。以前大阪大学に所属していたが、その際はPubMedで表記のあるジャーナルはほぼすべてとることが出来た。予算の関係もあるだろうが、どうにかならないだろうか。 Journal of medical genetics Am J Hum Genet のアカウント数増希望（しばしば繋がらない） 現在、図書館でも中止になってしまいましたが、是非、"SLEEP"があればいいと思います。			
(7) 図書館に提供して欲しいセミナー・ワークショップがあればご記入下さい。	PubMed、医中誌などの利用説明に関する講習会を定期的に行って頂けるとありがたいです。 Medline、医中誌以外の検索についてのワークショップ PubMedの使い方など、文献の探し方についてのセミナー			
その他	Lippincott Williams & Wilkinsのオンラインジャーナルは使いにくい。Medlineで検索して京大ボタンが出ているのにリンクでアクセスできないのはなんとかしてほしいです。あれとっても不便です。職員の方に聞くといつも丁寧に教えていただけるので感謝しています。			

図書館の方々の情報サービスにはいつも感謝しておりますし、学生さんからの満足度も概ね良好のようです。実現の難しい期待もあるかもしれませんが、「専門職大学院」の厳しい目を持ったユーザーからの声としてご検討頂ければ幸いです。図書館と私たち自身のより良い関係作りを願いながら、本稿を終えたいと思います。

（なかやま たけお）

## 附属図書館から

中山先生にはお忙しい時間を割いていただき、貴重な原稿をお寄せいただきありがとうございました。その中にありました「図書館の利用状況のアンケート」は、これから図書館のサービスを充実させるうえで貴重な資料となるものです。大変ありがたく思っております。

ホームページを見ていただく回数も毎日の利用者が約20%、2日～4日の頻度で見ていただく方を合わせると90%となり、ホームページを作成しているものにとっては大きな励みとなります。

アンケートのご回答をいただいている中で、図書館からすぐにお答えできることがありますので、次に列挙させていただきます。今後ともご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

なお京都大学構成員で、ご利用できる電子ジャーナル・データベースについては以下のURLをご参照ください。「京大附属図書館ホームページ電子図書館の中の学内向けサービス」

<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/gakunaiej.html>

<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/gakunaidb.html>

### 質問(2)6 (具体的に利用しているオンラインデータベース)

PubMedで検索したページから、京大マークでオンラインジャーナルを取り寄せているが、時々選択したページと異なったページが出てきてしまう場合があり、改善を望んでいる。

<回答>

PubMedからフルテキストデータへのリンク情報は、出版社などのデータ提供者がPubMedに対して提供しているものです。該当文献と異なったページにリンクするのは、データ提供者からの情報が間違っているものと思われる。京大側では修正できない事項ですが、PubMed作成元に修正を依頼する必要がありますので、発見された際には該当文献を図書館(下記連絡先)までお知らせください。

### 質問(2)7: 今後利用したいデータベースがあれば記入してください

あまり大学構内におりませんので、学外から

のアクセスを可能にさせていただきたく思います。

<回答>

電子ジャーナル・データベースともに契約サイトからの利用に限定されているのが通例です。ただし、エルゼビア社とワイリー社が提供する電子ジャーナルは、学外からのアクセスができる機能があります。他の出版社の電子ジャーナルについては、契約上の制約にて学外からは、利用できる電子ジャーナルが限られています。学外からの利用希望については、図書館(下記連絡先)にお問合せください。

UpToDateは必須です。ぜひ図書館経由で利用できるようにしてください。個人で買うのは高いです。

<回答>

ネットワーク版のUpToDateは非常に高額(約600万円)であるため、現在は導入が困難です。医学図書館内でスタンドアロン版での提供ができないか、検討しています。

どうも社会健康の人たちは一部心理に片寄っているの、心理系のjournalのデータベースも医学図書館経由で利用できるようになると貸借時のトラブルが減るのでは無いでしょうか?

<回答>

ご質問の趣旨が少し不明な点があるので、直接に図書館(下記連絡先)にお聞かせいただきたく存じます。

心理学系データベースとしては、アメリカ心理学会が刊行する心理学分野の文献情報誌「Psychological Abstracts」の電子版「PsycINFO」が2003年12月末まで全学に提供され、利用できていました。しかし残念ながらこれまで経費負担をしてきた部局が負担に耐えられなくなったため、全学での利用が2004年1月から出来なくなりました。非常に残念なことです。附属図書館商議会の「外国雑誌等に関する専門委員会」等で今後も全学での利用ができるように検討しています。

「SciFinder」

<回答>

化学関係分野の文献データベース「SciFinder Scholar」は、人環・総人、理学部、



薬学部、工学部、農学部、宇治地区、再生研、原子炉等の共同出資により提供されています。同時接続数が全学内で5人までと少ないため、頻繁に人数オーバーを起こしてしまうのが難点ですが専用検索ソフトをダウンロードするとご利用いただけます。図書館（下記連絡先）にお問合せください。

**質問（6） 現在提供されているものの他に、利用したいオンラインジャーナルがあればご記入ください。**

< 回答 >

ご利用希望の電子ジャーナルについては2004年度以降の検討対象として参考にさせていただきます。

図書館のサービス自体（職員の対応）には問題がないが、利用できるオンラインジャーナル（特に生物系）が意外と少ない。以前大阪大学に所属していたが、その際はPubMed で表記のあるジャーナルはほぼすべてとることが出来た。予算の関係もあるだろうが、どうにかならないだろうか。

< 回答 >

ご指摘のとおり、利用できる電子ジャーナル（現在約7000タイトル）は他大学に比べても少なく研究上も支障をきたすことがあるかと思えます。上述の附属図書館商議会「外国雑誌等に関する専門委員会」が担当して、全学的見地から検討の俎上に上がっていますが、予算的制約から、すべての電子ジャーナルを契約することは不可能です。また、電子ジャーナルの選定にあたっては、文献複写の申し込み状況等を参考にしながら、国内での入手が困難なものや利用頻度の高いものを優先的に導入するよう努力しています。

今後も電子ジャーナル・データベースの予算の確保は、重要な目標として認識しています。電子ジャーナルは確かに便利ですが、あまり利用頻度の高くないタイトルについては、他大学への文献複写申込みを利用する方が、費用対効果が高い場合もあります。文献複写については、附属図書館相互利用掛（753 - 2638）またはご所属学部・学科図書室にお問合せください。

Am J Hum Genet のアカウント数増希望（しばしば繋がらない）

< 回答 >

電子ジャーナルが利用できないときは、アカウント数以外に学内ネットワークやプロキシサーバ上の障害、提供元サーバ側の障害などいろいろな原因が考えられます。何度か試してみても繋がらなければ図書館（下記連絡先）にご連絡ください。

**質問（7） 図書館に提供して欲しいセミナー・ワークショップがあればご記入ください。**

講習会・ワークショップの開催希望について。

< 回答 >

講習会、ワークショップなど開催のご希望をありがとうございます。現在も附属図書館参考調査掛を中心として開催しておりますが、今後もご希望のデータベースなどや電子ジャーナルについて附属図書館や医学図書館で開催していく予定ですのでぜひご参加ください。

**その他**

Lippincott Williams & Wilkins のオンラインジャーナルは使いにくい。Medlineで検索して京大ボタンが出ているのにリンクでアクセスできないのはなんとかしてほしいです。あれとても不便です。

< 回答 >

Lippincott Williams & Wilkins (LWW@Ovid) は、安価で多くの電子ジャーナルを利用できることからパッケージ契約を行うことにより導入しているものです。ただし、京都大学専用入口を通過しなければ利用者認証ができないので、PubMedからはすぐ利用できない等の不便さがあります。一方で、利用できる電子ジャーナルは29誌から104誌に増加しています。PubMedのリンク先URLは提供元である米国医学図書館(NLM)仕様のみであり、ユーザー個別のURL登録はできません。PubMedのリンク先からでもパスワードを入力すれば利用できますので、医学図書館のホームページ（URL：<http://www.lib.med.kyoto-u.ac.jp/>）等で方法を確認してください。

図書館連絡先

附属図書館	参考調査掛	(075 - 753 - 2636)
医学図書館	閲覧掛	(075 - 753 - 4313)

# 新規導入データベース、電子ジャーナルのお知らせ

附属図書館情報サービス課参考調査掛

附属図書館では2004年に入り、新たに以下のサービスの導入を決定致しました。1月から順次、利用可能になっていく予定ですので、附属図書館ホームページでご確認の上、是非ご利用ください。

## (データベース)

- ・ LexisNexis Academic 分野(法律、経済、医薬 他)

Lexis Nexis (レクシスネクシス) 社が提供する法律情報、ビジネス情報、医薬情報の他、世界各国の新聞・雑誌に掲載されたニュース等、5,900以上の情報源にアクセス可能。

- ・ Derwent Innovations Index 分野(化学、電子・電気工学、機械工学)

ダウエント社の代表的特許情報である Derwent World Patents Index(R) と Derwent Patent Citation Index(R) を、姉妹会社である ISI の引用間リンクの技術で統合した Web ベースの特許情報源です。世界40カ国以上の特許発行機関から1,000万件以上の発明を含む2,000万件の特許を収録。データは毎週更新され、世界の技術革新動向を提供。

- ・ Web OYA-bunko : 大宅壮一文庫・雑誌記事索引検索 Web版 収録分野(週刊誌、総合誌、女性誌など)

豊富な内容とユニークな切り口で知られる、雑誌専門図書館・大宅壮一文庫の雑誌記事索引がWebで検索可能。

- ・ OCLC FirstSearch (全分野)

図書・雑誌・楽譜・地図・AV資料その他の資料のデータを持つ、世界最大の書誌データベース WorldCat にアクセス可能。

- ・ Early English Books Online 分野(人文科学)

初期英語書籍(1475~1700年刊) 10万タイトル、2300万ページを収録。著者、書名、印刷者、出版年、図版の種類(例えば地図、プレート、紋章)、米国議会図書館の件名標目

で検索可能。

- ・ The Economist Intelligence Unit (EIU) 分野(経済、政治)

英国の経済週刊誌「The Economist」の調査部門、The Economist Intelligence Unit (EIU) 社が発行する世界各国の政治経済に関する調査報告書のデータベース。

- ・ Internet Database Service (IDS) 分野(応用工学・テクノロジー、社会学、言語学・言語行動)

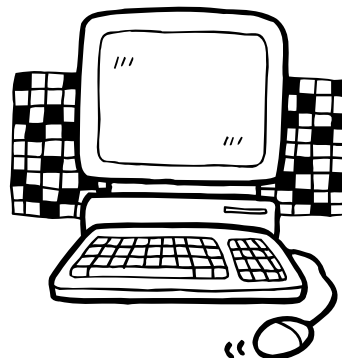
科学技術をはじめとした学術論文のインデックス業務を行なっている CSA (Cambridge Scientific Abstracts) 社が提供するデータベース。各分野の主要文献情報の他、専門家によって編纂されたインターネット情報資源データベースも提供。

## (電子ジャーナル)

- ・ EBSCOhost Academic Search Elite (ASE)

大学、学術機関向けに作られた電子ジャーナルアーカイブ。約1,840誌の全文(内1,280誌以上が査読誌)を収録。社会科学・人文科学の分野を中心に自然科学・医療・健康関連の雑誌も収録し、学術研究分野を網羅。

詳細は追って附属図書館ホームページ、広報誌 Library Service News (LSN) 等でお知らせしていく予定です。



# 附属図書館谷村文庫蔵『勅修百丈清規』元刊本・五山版 - 元代江南禅宗と日元文化交流の歴史を解明する重要資料 -

京都大学人文科学研究所助手 古松崇志

附属図書館谷村文庫には『勅修百丈清規』の元刊本と五山版の二種の版本が所蔵されている。まずはこの二つの刊本について、簡単な書誌情報を載せておく。

## 勅修百丈清規（元刊本）

谷村文庫 1-25 ヒ 2頁 二巻 二冊 元・至正三年(1343年)建安余氏刊 13行×23字 四周双辺 注双行 有界 版心黒口 外寸27.0×21.0cm 版框19.6×12.3cm 巻頭／目録、官文書、元・至元二年(1336年)立石黄潜「百丈山大智寿聖禅寺天下師表閣記」、元・至元二年(1336年)欧陽玄序（補抄） 巻末／唐・陳翊「唐洪州百丈山故懷海禅師塔銘」、宋・楊億「古清規序」、宋・宗鑑「崇寧清規序」、宋・惟勉「咸淳清規序」、元・弑咸「至大清規序」、元・至元四年(1338年)東陽德輝後序 刊記(巻首目録末尾)「至正癸未良月余氏思庵刊行」(巻末)「不欺道人余贊子校勘刊行」／各巻余白に室町時代の書き込みあり

## 勅修百丈清規（五山版）

谷村文庫 1-25 ヒ 1頁 二巻 四冊 刊年不詳五山版 13行×23字 左右双辺 注双行 有界 版心黒口 外寸26.8×18.5cm 版框21.5×14.7cm 巻頭／目録なし、ほかは元刊本に同じ 巻末／百丈懷海塔銘、四種の先行する清規序は元刊本に同じ その後元・至正七年(1347年)欧陽玄「加祖号跋」、元・一山了万書、元・延祐元年(1314年)晦機元照書、元・延祐三年(1316年)杜本題、東陽德輝後序

『勅修百丈清規』とは、中国の禅宗寺院における儀式や生活を規定する規則集である「清規」のひとつであり、十四世紀前半、モンゴル政権

支配下の元代中国江南で編纂されたものである。二種の版本のうち、元刊本は中国も含めほかにまったく所蔵を聞かない天下の孤本であり、重要文化財級のきわめて貴重な価値を有し、京都大学所蔵の漢籍刊本のなかでも屈指の優品といえる。巻頭・巻末の刊記より、元代の順帝トゴン・テムルの治世に当たる至正三年(1343年)に福建建安の有名な書肆余氏によって刊行されたものであることが分かる。福建建安は南宋、元、明代にかけて中国における書物出版の一大中心地であり、とりわけ朝鮮や日本といった海外向けの販路をもった書物版本の普及版出版が盛んに行われた場所であった。それゆえ南宋、元、明代中国から朝鮮や日本に伝えられた漢籍刊本は建安刊本が圧倒的に多い。建安刊本は一般に営利出版を目的とする坊刻本として一段劣る刊本とみなされがちであるが、『勅修百丈清規』元刊本は、版刻は鋭く切れがあって美しく、エディションとしても校勘の行き届いた非常に優れたものであり、元代建安刊本の中でも最高水準の刊本といえる。この刊本は日本に伝来後切り取られ、より大型の紙に貼付し、改めて装丁しなおされたものである。貼付した紙及び版框外に加えられた書き込みは明らかに室町時代のものであり、貴重な価値を持つ。

元刊本と五山版は、一昨年秋に本学附属図書館と総合博物館の共催で開かれた展示会「学びの世界 中国文化と日本」において初めて出陳され、観覧者に配布されたリーフレットに元刊本の写真が掲載された。また、そのカラー版図録には写真版と解説（筆者執筆）が掲載され





京都大学附属図書館谷村文庫蔵『勅修百丈清規』元刊本 刊記・順帝聖旨冒頭

た（平成十四年度京都大学附属図書館公開展示会図録『学びの世界 中国文化と日本』京都大学附属図書館、2002年、-4「禅籍と五山版」）。元刊本の存在自体は入谷義高氏の紹介（「元刊百丈清規について」『石濱先生古稀記念東洋学論叢』関西大学、1958年）によってつとに知られていたが、展示公開および写真版掲載はいずれも初めての機会であった。

私事に涉り恐縮であるが、筆者は数年前より附属図書館貴重書を調査する機会に恵まれ、折に触れて元刊本や五山版をはじめとする漢籍資料に触れてきた。そこで『勅修百丈清規』元刊本の現物に出会ったことが、元代禅宗史研究に着手するきっかけとなった。おりしも2001年春、京都大学文学部において、文科省科学研究費特定領域研究「古典学の再構築」の一環として日中韓三国の出版文化史の総合的な解明を目指す領域横断的研究会「日中韓版本研究会」が発足した。筆者は、『勅修百丈清規』の版本調査、さらにはその編纂過程の解明を具体的な研究課題として参加させていただくことになった。

研究をはじめて、『勅修百丈清規』は非常に重要な禅宗文献であるにもかかわらず、これまでその編纂状況の基本的な事実関係からしてきちんと分かっていないことが判明した。そもそも、時代背景となる元代の禅宗史自体が、ほとんどよく分かっていない。いわゆる中国禅宗史研究では、唐代や宋代の研究は重視されてきた

が、元代について突っ込んだ研究はほとんどない。それは何も禅宗に限ったことではない。一部のすぐれた研究を除けば、元代仏教史の研究全体が低調であったといえる。そこにはモンゴル政権による文化弾圧というひとつの先入観があった。ここ数年の内外の元代史研究の進展によって、そのような先入観がまったくの誤りであり、元代中国とは、モンゴル政権の意図的な政策によって文化振興が行われ、宗教勢力は全般に保護され大いに興隆した時代であったことが分かってきている。また、仏教のうち禅宗にしばってみると、元代仏教史では「崇教抑禅」、すなわち教宗（仏教の教学研究を重視する宗派）が禅宗を凌駕し、禅宗は一貫して冷遇されていたと考えられがちであった。とりわけ、モンゴル政権が南宋を滅ぼして江南を吸収した後、南宋時代に興隆していた江南禅宗は抑圧され、禅僧たちは反モンゴル意識を持つようになった、などと考えられもした。十三世紀後半より江南から盛んに日本へやって来た渡来僧たちを、征服者モンゴルの圧政から逃れてきた亡命僧であるとみる向きもあった。しかし、やはり近年の東洋史・日本史双方の実証的な研究の進展により、こうしたかつてのイメージは完全な虚構であることが明らかになっている。実はいくつかの資料から禅宗勢力もまた多くの宗教勢力同様に、政権との結びつきを求め、その既得権益の安堵が行われていたことが証明できる。ほかの宗派に比べて特に弾圧されたという形跡はなく、元代の江南禅宗もまた他宗派同様、全般に潤っていたと考えてよい。

さて、『勅修百丈清規』とその周辺に関わる文献を渉猟・収集し、研究を進めていくうちに、モンゴル政権のお墨付きを得た『勅修百丈清規』の編纂から刊行・流布をめぐる一連の動きこそが、元末における江南五山派の教団化・集権化を推進するきっかけとなり、江南禅宗史の一大画期となったことが分かってきた。ここでは、

筆者の研究過程の一端を紹介し、附属図書館に所蔵される魅力ある文献資料をいかに歴史研究に役立てることができるのか、一例を示してみたい。

『勅修百丈清規』編纂に至る経緯は、モンゴル朝廷の政治動向と大いに関係がある。西暦1328年、大元ウルスの都大都（現在の北京）でクーデタによって大カアンとして担ぎ出されたのが、武宗カイシャン（1307～1311在位）の王子で当時江陵（現在の湖北省）に流されていたトク・テムルであった。彼は父のカイシャンの死後、続く三代の大カアンの治世下では冷遇され、江南の各地を転々と流されていたが、その時に一時滞在したのが金陵（現在の南京）であった。そしてトク・テムルの大カアン即位後、金陵で滞在していた屋敷跡に、即位記念事業の一環として、政権の全面援助のもと大龍翔集慶寺という巨大寺院が建立された。その開山住持に任じられたのが『勅修百丈清規』編纂にも深く関わることになる笑隱大訥<sup>しょういんだいねん</sup>という禅僧であった。大龍翔集慶寺は官営寺院として、免税特権授与、寺院財産保護、度重なる大カアンからの賜り物など、当時考え得る最高水準の保護特権を享受し、江南禅宗五山寺院の上に立つことを意味する「五山之上」の称号を得た。そして、大龍翔集慶寺の僧と行宣政院（仏教統轄機関宣政院の江南の出先機関）の官が寺院の序列にもとづいて江南五山派禅宗寺院の住持を選任するという、人事権を掌握する特権も認められた。つまり、大龍翔集慶寺が江南五山派寺院の頂点に君臨することになったのである。ちなみにこの「五山之上」は我が国の五山制度でも導入された。これは南禅寺が龜山上皇の離宮であったことによるもので、夢窓疎石の門弟で中国通の義堂周信が足利義満に提案し、南禅寺を大龍翔集慶寺になぞらえたのであった。ただし、この事例は、新たに創建された相国寺を五山に入れるために、南禅寺を名目上「五山之上」にたて

まつたものであり、中国のそれとは意味を異にする。

大カアンのトク・テムルは1332年に若くして死に、その後順帝トゴン・テムルが即位する。このトゴン・テムルの治世に『勅修百丈清規』は編纂された。唐代に清規を最初につくったとされる百丈懷海とのえにしを持つ百丈山大智寿聖寺（現在の江西省北部）の住持東陽徳輝<sup>とうようとくき</sup>（彼はこれに先立つ1330年に住持となる。この人事自体が大龍翔集慶寺住持として栄達を遂げた法兄の笑隱大訥の画策による可能性が大きい。自分たちのつくる清規こそが唐代百丈懷海のつくった清規の正統な継承者であることを主張するために百丈山を勢力下に置くことが必要であった。）と笑隱大訥が協同で政権有力者に働きかけを行い、元統三年(1335年)七月十八日、トゴン・テムルの聖旨を得ることに成功する。『勅修百丈清規』冒頭目録の後には三通の官文書が載せられているが、その冒頭にこの聖旨が収められている。聖旨とは、「おおせ」を意味するモンゴル語ジャルリクの漢語訳で、大カアンが口頭でモンゴル語によって発した命令を文書化したもので、あらゆる法規・命令を超越する絶対的な権威・効力を持つ。モンゴル語の命令は、支配地の言語に応じ翻訳されるが、中国方面向けの場合は、当然のことながら漢語に翻訳され、それは当時の白話語彙を多く用いた独特の文体で綴られた。『勅修百丈清規』冒頭の聖旨はこのモンゴル語直訳体漢文で記されている。上掲写真の左側の一葉がそれであるが、漢文に少し親しんだことのある方なら、一見してこの文章が普通の雅文漢文とは語法を異にするものであることがお分かりいただけたと思う。

この聖旨は、江南禅宗寺院の中で、東陽徳輝が新たに編纂した清規だけをただひとつ通行可能な清規として認可するという特許状であった。この特許状は東陽と笑隱らに与えられた。本書がタイトルに「勅修」を含むのは、こ

の聖旨を得て編纂されたものであるからにほかならない。東陽は、北宋時代の『禅苑清規』、南宋時代の『叢林校定清規総要』、元代の『禅林備用清規』という先行する三種の清規の内容を集大成する形で取り込みつつ、『勅修百丈清規』として新たに編纂を行い、笑隠らを中心とする大龍翔集慶寺での校正作業を経て、至元四年(1338年)ごろに完成にこぎつける。笑隠らの思惑通り、特許状聖旨を得た結果として、江南禅宗寺院では『勅修百丈清規』のみが使用されるようになり、上述三種の先行清規も含め、宋代以来各寺院において独自に用いられていた清規は完全に淘汰されてしまった。

以上のような状況は、この特許状を得たことの効力がまことに絶大であったことを示すものである。ただし、当時、カアンのトゴン・テムルはまだ幼く実権を持たない傀儡であり、朝廷ではメルキト族の実力者バヤンが軍勢力を掌握し、彼と結んだ亡きトク・テムルの皇后<sup>カトン</sup>ブダシリが太皇太后として君臨していた。ブダシリは大蔵經の刊行なども行い、仏教をたいへん尊崇した女性であったことで知られるが、トク・テムルの不遇時代、夫と共に金陵に滞在したことがあり、即位後の大龍翔集慶寺創建にも関わっていた。笑隠らは、恐らくはブダシリあるいはその側近や政権有力者との関係を使って特許状を得ることに成功したのであった。

さらにほぼ時を同じくして、笑隠は大龍翔集慶寺の終身住持の特権と「釈教宗主兼領五山寺」の肩書きを与えられる。これはトク・テムル時代の特権をさらに強化する意味合いを持った。『勅修百丈清規』編纂と連動して、笑隠を中心とする大龍翔集慶寺が江南五山派寺院の頂点に立つことが再確認されたのである。これらの動きによって、江南五山派では大龍翔集慶寺を中心にして、寺格の序列に応じて住持を選任する集権的な教団体制が形成された。有名な五山・十刹・諸山という禅宗寺院の格付けもこの時期

に整備された可能性が高い。通説では五山十刹制度は南宋から存在したとみなされている。ところが、南宋にこの制度が成立したとの記述は、明初の文人官僚<sup>そうれん</sup>宋濂による著述に初めてみえるものであり、南宋の同時代文献には現れない。杭州・明州(現在の寧波)にあった五つの禅宗大刹は、南宋朝廷から保護を受けており、当時から五山という称号があった可能性は考えられるが、五山・十刹・諸山という系統的な序列があったことまでは文献上確認できないのである。そもそも、宋濂の文章は史料性の高いものではあるものの、特に元以前の事柄については、すべてを鵜呑みにすることは危険である。また、日本に残る『扶桑五山記』には、最もまとまった中国五山に関する記述「大宋国諸寺位次」を記すが、その内容は明らかに元末・明初の状況を反映するものであり、南宋のものともみなすことはできない。

『勅修百丈清規』は完成後、非常に流行し、政府のお墨付きを得た清規の決定版として広く用いられた。現存する元刊本は附属図書館所蔵の一本のみであるが、元代のうちに何度も版刻されたことが分かっている。そして、『勅修百丈清規』の流行は、日本にも及んだ。当時、大陸と日本の間では盛んな交流が行われており、その担い手は新興の知識人でもある禅僧たちであった。禅僧の間では中国留学熱が起こり、中国からの高僧の来日もあいついだ。大陸で新たに出版された『勅修百丈清規』は、帰国した留学僧によってもたらされ、日本において覆刻版(五山版)が出版されている。建武二年(1335年、元・至元元年)より十年以上入元した経験を持つ古鏡明千が、文和五年(1356年、元・至正十六年)に京都において刊行したものが最初の五山版出版である。附属図書館谷村文庫に所蔵される五山版は、川瀬一馬氏の『五山版の研究』によると、この文和刊本に補刻が加わり、刊語が除かれたものとされる。日本では十本以



上の五山版が残存し、補刻も多くみられ、大量に版行されていたことが分かり、その流行ぶりをうかがわせる。また、南北朝・室町時代に五山学問僧によって盛んに講義も行われ、その内容の一部は抄物しょうものの形で残っている。

五山版は現存元刊本と行格を同じくし、本文の字句もほぼ同じであり、同一系統の版本とみてよい。それは校訂の行き届いた優れたものである。一般に『勅修百丈清規』は大正大蔵経版が従来用いられてきたが、大蔵経系統の版本は、不適切な改行などがほどこされ、誤刻も多くみられる明初刊本（『続修四庫全書』所収）の系譜を引いており、さらに明代万暦年間にいわゆる『北蔵』の続蔵部分より大蔵経に入れられるに当たって不適切な分巻が行われており、テキストとしてはよるべきではない。本書を利用する際には、原型をよく残し、校訂も行き届いた日本のみに残る元刊本・五山版によるべきなのである。五山版は元刊本と同一系統の版本と推定されるものの、版框サイズは異なり、元刊本にはない附録も加えられていて、双方の間に直接の親子関係はない。五山版の附録は清規成立過程に関する貴重な史料となるもので、重要な意味を持つ。日本で独自に編集されたものとは考えにくく、恐らく、現存する谷村文庫蔵元刊本とは異なる附録を増補した元刊本をもとに五山版が覆刻されたものと考えられる。もととなる附録を増補した元刊本の中国（恐らくは建安）での出版は、附録で最も新しい欧陽玄「加祖号跋」が書かれた至正七年（1347年）以後、最初の五山版が出版される文和五年（1356年）以前ということになる。古鏡明千による五山版出版は、大陸での附録増補本の出版より十年も経たないうちになされ、まさしく当時の最新版を出版したものだのである。

『勅修百丈清規』が日本で出版された時代は、足利政権と夢窓疎石門派によってまさに集権的な禅宗管理機構が整えられていった時代に当た

る。足利政権による五山十刹の序列整備は、暦応四年（1341年）に行われている。その翌年には、夢窓疎石の提案によって足利政権が天龍寺造営船を派遣している。さらに同じころ、足利政権初期において禅宗寺院を管理する機構として禅律奉行という組織が置かれたが、この組織は禅林では「宣政院」と呼ばれていた。また、鎌倉にも足利政権の禅宗管理機構が置かれ、その名称は「行宣政院」であった。宣政院はモンゴル政権の仏教統轄機関の名称で、行宣政院は江南杭州に置かれたその出先機関であった。組織の内実は別として、当時の日本禅宗叢林が元代中国の制度を強く意識していたことは疑いない。夢窓疎石の死後、春屋妙葩しゅんおくみょうはが門派の中心人物として活躍したが、足利義満の信任を得て康暦元年（1379年）に僧録に任じられ、五山十刹以下の禅宗寺院の住持任命権を握って、禅宗教団の頂点に立つことになる。こうした教団化の動きを日本独自のものとするべきではなく、その模範はやはり大陸にあると考えるべきである。笑隠が中心となり大龍翔集慶寺を頂点とした元末の江南禅宗五山派の教団化、あるいはそれを受け継いだ明代初期の善世院の組織機構を意識したものであったと考えられる。『勅修百丈清規』は、日本五山の禅宗教団の根幹をなす制度が、元代の大陸の制度を模範として取り入れ、確立していく流れの一環として導入された可能性が高いのである。

谷村文庫所蔵の『勅修百丈清規』元刊本・五山版は、元代江南禅宗の制度・儀式を詳細に伝えるこの書物の最良の刊本であるのみならず、南北朝から室町時代にかけて日本の禅宗が元代中国の制度に範を採って学んだことを今に伝える実物でもあり、無二の貴重な文献資料なのである。（ふるまつ たかし）

## (「利用者の声」) 京都大学の歴史を語る資料群とその保存

京都大学大学院教授 高橋 康夫

筆者は工学研究科の建築学専攻に属し、日本都市史・建築史を専門としている。エンジニアリングのなかの歴史学ということで、一見めずらしく思われるかもしれないが、日本の工学部建築学科ではごくふつうのことといっていよい。都市史・建築史の研究者は、日常的な研究活動においては、いわゆる文系、とくに歴史の分野の人たちの行動とほとんどかわりない。建築の図書室はもちろん、文学部など他学部の図書室、そして附属図書館を利用することも少なくない。さいわいなことに、研究の進展とともに必要となるさまざまな史料や文献の多くが学内に所蔵されており、ほとんどの場合にただちに参照したい資料を手にすることができる。最近、17世紀から19世紀にかけて出版された中国の書籍などを利用するようになってきているが、めずらしい貴重な書籍さえ、あたりまえのように文学部や人文科学研究科の図書室には備えられている。京都大学においては、このような状況は、もちろん歴史の分野に限ったことではなく、ほとんどの分野でトップレベルの蔵書を誇っているのである。これはまことに「有り難い」ことである。

筆者の所属する建築の図書室にも、およそ10万冊の蔵書がある。学科レベルの図書室としては多い方ではなかろうか。蔵書のなかにはきわめて貴重な外国雑誌や江戸時代以前の和書、古文書などもあり、学内はもとより、学外からの利用も絶えることはない。

蔵書およそ10万冊のなかにはかなり多くの割合を占めているのは、私の研究分野、すなわち建築史学の分野であるらしい。建築史講座は大正11年(1922)の建築学科創設当初からある講座で、今にいたるまで関連分野の図書や資料を収集、購入し、研究環境の整備・充実を目指して

きた。建築史学は、建築学の一分野であると同時に、歴史学の一分野であるから、備えておきたい図書などはもちろん歴史学のそれと共通している。むしろやや広い領域、具体的にいうと、狭義の歴史学、美術史、人文地理学、哲学、庭園史の分野などにわたってそろえようとしている。

実験系の建築史講座は、非実験系の歴史分野と比べると、ある程度予算の余裕があり、したがって購入図書の数などは建築の図書室の方が多かったようである。そのため建築史研究室の教官や学生が利用する一方、文学部や農学部、旧教養部など他学部の歴史学、美術史、人文地理学、哲学、造園学、庭園史の分野の教官・学生などからの利用も少なからずあった。つまり工学部建築学科の図書室が、ささやかながらある意味で全学的な役割を果たしていたといってもよいのではないか。

ところで、工学研究科の桂キャンパスへの移転がすでに始まっている。電気系と化学系の各専攻はすでに桂キャンパスへ移り、建築学専攻は来年の夏ごろに移転することになっている。この数年、文系の人たちと雑談する折によく聞かれることは、建築はいつ桂キャンパスへ移るのか、また図書室はどうなるのかということである。質問の本意は、今までのように建築の図書室が手軽に利用できなくなり、不便になるということのようである。

工学研究科の各専攻の図書室も、それぞれに学内の共通する専門分野の図書室と学術専門雑誌の利用などにおいて、たがいに支えあっているであろうが、建築の図書室の場合、相互利用の度合いがより大きいように思われる。建築学専攻の桂キャンパス移転にともない、図書も桂へ移動する。キャンパス移転後も、当然のこ



とながら、他学部の分野の教官・学生などからの図書の利用要望は変わらないであろうし、また建築史分野の教官・学生も、これまでと同様に他部局の図書室や付属図書館を利用するにちがいない。おたがいに不便さを嘆くことになるが、吉田と桂にキャンパスが分かれているかぎり、この状況は永続的であり、恒常的である。したがって、どのようにすればともにこれまでと同じような便益を享受し、研究と教育を継続できるかが大切な課題となろう。関係者にとってきわめて切実なこうした課題がすでに検討されていればたいへんありがたいことである。

さて、京都大学が百年をこえる教育と研究のなかで収集してきた膨大な図書、貴重な資料は、ある意味で京都大学の「知」の歴史をあらわす「文化遺産」とみることができる。同じような「文化遺産」として、教育と研究のために購入され、あるいは創意工夫してつくられたさまざまな教育用機器・研究用実験機器・試作機器など、いわゆる科学史・技術史関係の資料が数多く残されている。さらに教育と研究の場そのものであった、歴史のある建築施設群も保存されている（京都大学が保存を定めた「歴史的建造物」、このうち数棟が国の登録文化財になっている）。これらの広い意味での資料群もまた、京都大学の「知」の歴史を物語る貴重な「文化遺産」なのであり、「歴史の記憶」そのものである。

図書資料については、とりわけ吉田キャンパスは質・量ともにまさに宝庫といって差し支えなく、適切に管理・運営されていると思われる。しかし、それ以外の資料群についてはかならずしも良好な状態とはいえないのではないかと。本学の「歴史的建造物」は、すべてが国の登録文化財になされるべきであろう。とくに事務局本館が形を変えて再生された今、旧土木工学教室本館や建築学教室本館を登録文化財にする手続きが急がれるべきではないか。百年の歴史をもちながら建築の重要文化財の一つもないという

ことは、京都大学としてある意味で恥ずべきことであると思われる。50年後あるいは100年後、建築の重要文化財があると誇れるように、いいかえると歴史と文化の香るキャンパスを形づくってきたと内外に自信をもっていえるようになるため、長期的な視野にたった配慮が必要である。

京都大学が抱えている大きな問題は、技術史関係の資料群の取り扱いである。長い歴史をもち、戦災や火災に遭わなかった京都大学には、技術史資料が多数残されていると思われる。しかしながらさまざまな事情から社会の期待するほどには残っていないのではないかと危惧される。工学部や理学部、農学部、総合人間学部などが現在、どのような技術史資料を所蔵しているかを再確認したうえで、また総合博物館のあまりにも貧弱にみえる技術史部門のありようの再検討もふくめて、あらためて京都大学における技術史資料の保存・活用の方策を考えてみてはいかがであろうか。

独自性をもつことが期待される今後の京都大学において、技術史資料を整理、保存、展示、公開することは、学部学生の技術史教育に対する有用性に加えて、大学として果たすべき社会的な役割、また社会からも果たすべきと思われるたいせつな役割の一つと考えられる。

京都大学のキャンパス、すなわち教職員・学生の生活空間そのものが、長く豊かな「知」の歴史と文化を物語るものになることを期待したい。  
(たかはし やすお)



# 「工学研究科化学系図書室」誕生の記

桂キャンパス 工学研究科化学系図書室 富田 知子

おおよそ引っ越しというものは、それが個人のものであれ公のものであれ、多大な労力と資金、有形、無形の山のようなゴミ処理、準備不足からくる（どれだけ用意周到にしていたつもりでも必ず不備はつきものである）後悔、そして将来に対する不安や期待などなど、一時に10年分程のエネルギーを要求されます。

2003年6月末から9月初めの2ヶ月間かけて、「工学研究科化学系」が桂キャンパスに移転してきました。この大きな変動の波間をさ迷いながら「工学研究科化学系図書室」が誕生しました。気がつけば、500平方メートルの図書室に職員は1人で、「お引っ越し」の全てを背負って右往左往している只中に、附属図書館情報管理課から「静脩原稿依頼」という名の命令らしきものがきました。

テーマは「桂新キャンパスの図書室について」ということですが、「工学研究科化学系図書室」は6専攻（材料化学、高分子化学、合成・生物化学、化学工学、分子工学、物質エネルギー化学）で構成されています。図書室はワンフロアで、明るくゆったりしていて、集められた図書資料は全て開架式で一望出来、利用者には好評です。入り口の広いロビーに並べられたカラフルなソファがコンクリートの壁に映えています。ということで、何はともあれ実際に見ていただくに越したことはありません。

図書室の蔵書構成や内容、利用方法については、10月初めに出しました「利用案内」を見て下さるなり、電話等でお問い合わせ戴くなりして下さい。

肝心の「化学系図書室」の理念ですが、これを掲げられるほど議論を重ねてはおりません。しかし、激しく変動する社会の中での大学の有り様、その大学での図書館（室）の役割は、大

変厳しいものがあります。当然「化学」分野の独自性も考えなければならないと思いますし、過去を踏まえながらどのように変化し、如何に変化しないでおくのか難しい選択を迫られることもあります。

ここ数年における電子媒体の増加は著しいものがあります。「化学系」における購入雑誌については2003年からその多くを電子ジャーナルに切り替えました。それらは利用者には大変便利であるし、また図書室にとっても物理的に場所をとらないことや、冊子体に付随する諸々の管理業務からは開放され、軽減されるといったメリットは大きいものがあります。しかしながらデータベースや電子ジャーナルには、その便利さと引き換えに莫大な経費が必要となり、その経費を巡って該当専攻科や学部間での調整や負担金配分といった従来なかった事務業務が増えることになりました。

例えば化学分野のデータベースであるSciFinderや、電子ジャーナル、冊子体の経費負担について、その分担方法や分担金の計算でここ数年教官および、職員がどれだけの労力を費やしてきたことでしょうか。年々増大する金額を前にして、その負担金の配分の難しさに徒労感ばかりがつのります。そしてまた、昨今のウイルス攻撃や不正利用などのWeb上での出来事をみていると、将来に亘って安全に維持することへの不安と困難さも感じてしまいます。

研究のスピードから雑誌ばかりに気が取られている昨今ではありますが、図書室での専門図書（単行本）の充実は、是非とも必要なことです。新図書室は、この点では余りにも貧弱です。何しろ3図書室（化学工学、物質エネルギー化学、合成・生物化学）で所蔵していた研究用図書をかき集めてきただけですから・・・。新図

書室が出来て数ヶ月ですが、そんなお粗末な内容にも関わらず多くの利用者がいます。これらの専門図書を整理し、さらに充実させていくというのがこれからの大きな仕事でもあります。

現場で教官、学生と接していると、化学を研究している人の世界がもっている空気が伝わってきます。膨大なデータベースを駆使しながら日々格闘しているのであろうことを思うと、正直大変な世界になってしまったと思ってみたりもします。常に他人の研究内容をチェックしなければ自分の研究が進められないといったことも聞きます。厳しい世界ではありますが、「競争原理」や「効率」ばかりが重視されるのであればあまりにも寂しいことです。

世界がどんなに変動しても、というより変化が激しいほどその状況をしっかり理解しなければならぬと思います。書籍にじっくり向き合う人の為に、やはり司書の役割は重大であることもまた変わりないはずです。人事異動の激し

い昨今ではありますが、逆に化学分野の図書室（合成・生物化学）に長くいたことが、強みになるようころしたいものです。

さらに、「開かれた図書室」、「情報発信する図書室」といった難しい課題もあります。

なにはともあれ、「化学系図書室」が新しい地・綺麗な建物に生まれ3ヶ月、規模も適宜で、運営も軌道にのりつつあります。

過去、現在、未来が混交する中で日々翻弄されている私ではありますが、日常性を突き破られいろいろ考えさせられる生活を送れることは幸せな廻り合せだったのかも知れないと、最近思っております。

職員は1人だと述べましたが、実は多くの方々に助けていただいております。特に工学部図書掛の方には吉田に残してきた雑誌の整理や後片付けや2004年の準備等、多大なお世話になり感謝しております。

2003.11.25

(とみた ちかこ)



桂地区  
Aクラスター



化学系図書室

## 桂キャンパス移転と電気系図書室

桂キャンパス 電気系図書室 赤澤 久弥

京都市街を東に望む丘陵上、桂キャンパスの一角に、2003年10月から桂電気系図書室が開室しました。

電気系図書室は、「工学部等図書室」と呼ばれる、工学研究科と関連部局に設置されている図書室の一つです。専門分野の研究を支援する図書室として、電気・電子工学分野を中心とするユニークなコレクションを所蔵しており、電気系内のみならず、学内外から広く利用があります。また電気系の授業に密着した図書を配置していることもあり、とくに学部生の利用が多いことも特徴になっています。

化学系・電気系専攻を第一期として始まった、桂キャンパス移転。これから数年かけて、工学研究科・情報学研究科が移転します。一方、工学部の教育はこれまでどおり、吉田キャンパスで行われる予定です。また、桂キャンパスにおける「工学部等図書室」の役割を担う、「桂図書館」の建設も計画されています。こうした現在進行形の変化の中にあって、桂キャンパスが完成するまでの間、桂地区でのサービスを提供する桂電気系図書室、そして吉田地区で学部教育支援を始めとする機能を果たす、従来の吉田電気系図書室という、“二つで一つ”の電気系図書室が生まれることになりました。

桂キャンパスAクラスター内にある桂電気系図書室は、広さ200㎡ほど。夜間利用にも対応できるよう入口には電子錠を備えており、閲覧席にパソコンを持ちこんで、遅くまで論文を作成する院生さんの姿も見られます。所蔵資料は、当面の研究・教育のために、吉田電気系図書室の図書や雑誌の一部を移動させたものが主になります。また今回の移転を機に、これまで研究

室に所蔵されていた学位論文が、電気系の重要な知的生産物のひとつとして、図書室で保管されるようになりました。あわせて、研究室に置かれていた図書や雑誌の一部も収容され、これらは早速、活発に利用されています。しかし、現在の桂電気系図書室の資料の量は、やはり充分なものとは言えません。そこで不足するところは、電子ジャーナルを導入したり、キャンパス間で資料をデリバリーすることで補っています。一方で桂地区の資料は、既にキャンパス外からも利用されていますので、これから移転が進むにつれて、桂キャンパス所蔵となる資料へのニーズは、いっそう増えることが予想されます。電子ジャーナルなどオンライン資料の整備、本や複写物をデリバリーするシステムの充実、今後、分散キャンパス体制における資料アクセスの保障として京都大学全体の課題となるものかもしれません。

キャンパス移転という一大プロジェクトに限らず、現在の大学には、大きな変化の波が押し寄せているように見えます。しかしその中でも、大学図書館が、多様な分野に渡る様々な形の資料や情報を収集し、それらへのアクセスを提供しながら、未来へ保存していくことは、本来の機能であり続けるでしょう。また、図書館が持つ、資料と情報のもとに人が集い、そこから新たな創造を生み出す、“場”としての役割は、これからも変わらないはずです。キャンパス紹介のパンフレットによると、桂キャンパスは、「研究分野の枠組みを超えた、国際的な産学が共同する様々な融合と交流により、学問の新分野を生み出す」場であり、そして「地域社会との協調」の場ともされています。こうし



たキャンパスの顔として、まさに図書館の機能と役割が、求められているのではないのでしょうか。

35年前の電気系図書室の紹介記事（「静脩」5(3):1968）に、教室図書室の機能を有機的に結ぶものとして、「工学部の総合図書館」の可能性を述べたくだりがあります。利用者のすぐ近くにある「工学部等図書室」の利点を活かしながら、将来の図書館のあり方を視野に入れて、変化に対応したサービスを提供していくこと。それが、今の電気系図書室の目標です。

（あかざわ ひさや）



桂地区 電気系図書室

## 教官著作寄贈図書一覧（平成15年9月～12月）

身 分	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
文学研究科	紀平 英作	人文知の新たな総合にむけて「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第一回報告書	文部科学省	2003
文学研究科	中務 哲郎	饗宴のはじまり	岩波書店	2003
文学研究科	中務 哲郎	物語の海へ ギリシア奇譚集	岩波書店	1991
教育学研究科	川崎 良孝	図書館員選書31 図書館の歴史（アメリカ編増訂第2版）	日本図書館協会	2003
教育学研究科	川崎 良孝	図書館の原則 改訂版 図書館における知的自由マニュアル（第6版）	日本図書館協会	2003
教育学研究科	川崎 良孝	図書館の目的をめぐる路線論争	日本図書館協会	2003
農学研究科	岩井 吉彌	Forestry and the Forest Industry in Japan	UBC Press	2002
国際融合創造センター	富田 直秀	ちゃっちゃんの遊園地	ゆみる出版	2003
国際融合創造センター	富田 直秀	心と科学と“こころ”	講談社出版サービスセンター	2002



## 企画展の舞台裏

### 平成15年度附属図書館公開企画展を終えて

附属図書館情報サービス課参考調査掛 藤原由華  
(公開企画展ワーキンググループメンバー)

このたび、公開企画展「和算の時代 日本人の数学力をたどる」にワーキンググループの一員として参加し、教官と力を合わせて展示を作り上げるという、非常に面白い経験をさせていただきました。ここに、私がかかわった範囲で企画から開催までを断片的に取り上げて、企画展の舞台裏を少しでも紹介したいと思います。

#### ・和算って何だ

今年度の企画展テーマは「和算資料」と決まったものの、私たちはほとんどみな「和算って何？」という状態からの出発です。そこでまず、理学部数学教室に押しかけて、上野健爾先生に特別レクチャーをしていただきました。その後、各自参考図書やウェブページ、そして何よりも展示資料を通して、おぼろげながらも「和算」と江戸時代の人々の豊かな数学の世界について、少しずつ理解を深めていきました。

#### ・ネタを探せ

今回の展示会構成の中で、第1章「「数」のある風景」と第2章「数学力の原点 32の塵劫記」は、章構成から解説まで、全て私たち図書館員の手ゆだねられました。とくに第1章は、一から資料を探さなければなりません。手分けして、数や数学にかかわる文学作品・歴史資料等をピックアップし、京大での所蔵を確認する、という作業が続きました。先行研究の確認はもちろん、辞書の用例・文学索引のたぐい等々、手探りの調査でしたが、非常に面白い作業でした。たとえていうなら、宝捜しの面白さとても

言えるでしょうか。

#### ・親しみやすさを目指して

今回の企画展は、専門家だけではなく、高校生や一般の方にも楽しんでいただける展示会にすることに、初めから重点を置いていました。そのために、例えば第2章では、絵に着目して同じ問題のさまざまなバラエティーを楽しんでもらう、という方法を取りました。また、問題の解き方の解説パネルも用意しました。図録原稿も含めた全ての解説文は「ですます」体に統一し、ポスターも親しみやすさを前面に出したデザインにしました。

#### ・工房の職人たち

資料選定・構成・解説執筆が一段落すると、実際の展示作業に入ります。資料を搬入し、バランスよく配置していきます。それが済むと、解説文などを、レイアウトをよく考えてプリントアウトした後、粘着パネルに貼って、切って...というパネル作成の作業がひたすら続きました。また、今回は大きな地図を出展していたため、それをどのように展示するか、工夫が必要です。パネルを2枚貼り合わせ、アクリル板で押さえつけて固定しました。開催1週間前の展示会場は、まさにどこかの工房のよう。みな、鉛筆と定規とカッターナイフを手に、一心不乱に作業を続けました。

また、算木の複製は、ワーキンググループの特別チームが、材料から塗装、仕上げに至るまでこだわって作成した、まさに職人技が光る逸品です。

以上は、今回の企画展準備のほんの一端に過ぎません。サービス課長・専門員は様々な方面との折衝・調整に奔走し、共催の思文閣美術館の方々にも様々にご尽力いただきました。そして何にもまして、上野先生のあらゆる面での惜しみないご協力がなければ、この企画展は開催には至らなかったでしょう。できる限りのことは図書館員の手でやろう、との意気込みで臨んだ今回の企画展でしたが、3・4・5章全ての解説執筆・資料選定に加えて、全体の監修、他

機関からの展示品貸借にいたるまで、先生には多大なご負担をおかけしました。にもかかわらず、いつもにこやかに引き受けてくださった先生のお人柄に、メンバー一同、心より感銘を受けました。

教官と図書館職員がそれぞれ力を出し合って創り上げた附属図書館公開企画展、お楽しみいただけましたならば幸いです。

(ふじわら ゆか)



## 「宇治キャンパス公開2003」に 附属図書館宇治分館が参加

附属図書館 宇治分館 菅 修 一

10月3日（金）13:00～16:30と4日（土）9:30～16:30の2日間、宇治地区では「宇治キャンパス公開2003」が開催され、多数の市民が来場した。このキャンパス公開で附属図書館宇治分館は昨年に引き続き資料展示を開催した。今年のテーマは、「懐かしい日本の風景」と題して、二部構成で行った。第一部では当館所蔵の和雑誌からグラビア写真の頁を多数展示した。椅子式家具による生活モデルを示した「公務員アパートの住い方」（工芸ニュース第18巻11号（1950））・現在は周囲にたくさんの建物が立つ京都南インターチェンジ付近だが開通当時は閑散としていた様子がわかる「空から見るインターチェンジ：開通した名神高速道路」（月刊建設第7巻8号（1963））・今はもうなくなった阪神パークにいた「レオパンの成長日記」（科学朝日第21巻3号（1961））・琵琶湖大橋の完成までのプロセスを示す「琵琶湖大橋完成」（土木学会誌第49巻12号（1964））・「スタートした京大の大型計算機センター」（科学朝日第29巻3号（1969））等、戦後昭和20年代から昭和40年代半ばまでの日本の風景を並べた。第二部では、関

係者の好意で明治から終戦までの小学校教科書の実物を展示し、挿絵で日本の風景を追っていた。「二匹の蛙の話」（『高等小学読本第三』（明治20））は大阪見物に出かける京都の蛙と京都見物に出かける大阪の蛙が天王山で出会う話である。見学者からは、変体仮名で書かれた文章を読みながら、当時の小学生が随分難解な文章を勉強したことに感心したとの声があった。また、「京都の市街」（『尋常小学地理書巻一』（昭和15））は、東本願寺前を市電が走る様子が描かれていた。

はじめて大学図書館の中に入られた方も多かった。また、お仕事の関係で宇治分館所蔵の和洋の学術雑誌に関心を示される方も多く、学外者の利用についてのご質問もあった。小さなお子さんを連れたおかあさん、高校生、来年から宇治キャンパスで大学院生活をおくる人、たくさんの方に見ていただいた。宇治キャンパスの教職員・院生の方も展示を興味深く見ていただきうれしかった。入場者は2日間で120名（内訳10月3日12名、4日108名）であった。

（すが しゅういち）



資料展示の様子 撮影：今井政敏（宇治地区事務部研究協力課）

# 「京都大学における今後の図書館」

京都大学における今後の図書館の在り方についての検討が2つの場で開始された。

## 1. 部局長会議のもとに設置された「図書館検討ワーキンググループ」

**設置趣旨** 全学支援機構検討WG報告の中で「図書館利用にかかわる全学支援の立場から検討を深める必要がある、図書館の専門的視点から検討することが望ましい」とされた。これを受けて部局長会議で総長から「学術情報を学習・教育・研究の過程で提供する役割を担う図書館の体制の今後の在り方について、構成員へのサービス提供と適切な社会貢献を実現するために、全学的立場（経営の観点を含めて）から検討するWG」という設置趣旨の説明があり発足した。

金田章裕副学長を主査とし、文学部長を始め各分野の部局長、事務局長、情報化推進官、附属図書館長など18名の委員で構成。

第1回会議は、12月24日に開催され、各委員より京都大学の図書館が抱える課題について意見が出された。年度末を一つの目処に新たな図書館像をまとめることになる。

## 2. 附属図書館商議会 図書館政策委員会

**設置趣旨** 京都大学全体の図書館サービスの充実を実現するために学内図書館・室の連携方策など、法人化後の図書館運営のあり方を検討する。

佐々木丞平附属図書館長を主査とし、部局長以外の商議員及び研究開発室員など28名で構成。

政策委員会のもとに幹事会（WG間の意見調整担当）、第1～第3ワーキンググループを設置。

第1WG（共同事業） 全学あるいは複数部

局が共同で実施することにより実現できる新たな事業や、単独では開発・維持が困難になってきた業務等を担当。松岡久和商議員（法学部）を主査とし、9名で構成。

3回開催。図書館の在り方、組織、スペース確保、利用規程等を討議。

第2WG（蔵書整備）電子ジャーナル・データベースを含め、京都大学で必要とする蔵書及び情報リソースの確保・整備方法、その他蔵書整備に関することを担当。

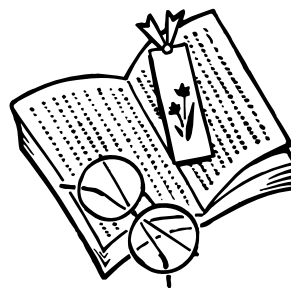
金坂清則商議員（総合人間学部）を主査とし、8名で構成。

3回開催。図書館資料の保存スペース、重複購入調整、遡及入力促進、電子媒体資料の費用負担等を討議。

第3WG（サービス）学部生、研究者にとって不足しているサービス、図書館機能を有しない部局や遠隔地部局への図書館サービスの在り方等を担当。

大高幸一郎商議員（工学部）を主査とし、8名で構成。

3回開催。留学生からの要望、図書館間デリバリー、利用規程、学生に対する支援体制等を討議。



## ..... 図書館の動き .....

平成15年	24日	スウェーデン大学長団訪問
9月1日	27日	附属図書館承継資産調査作業開始(アルバイト雇用)(~12月26日)
11日	28日	上海図書館研究員等来館
12日	11月5日	滋賀県立膳所高校生見学来館(49名)
17日		タイ国マヒドン大学教官・図書館員来館
19日	7日	諏訪清陵高校生見学来館(10名)
10月1日	8日	平成15年度京都大学附属図書館公開企画展(思文閣美術館、~12月7日)
3日		同上第1回記念講演会(上野健爾教授、鳴海 風氏)
	10日	平成15年度漢籍担当職員講習会(~14日)
		文部科学省情報課学術基盤整備室長當麻氏来館
	11日	第1回附属図書館商議会図書館政策委員会幹事会
	13日	第55回国公私立大学図書館協力委員会(於:東大)
		平成15年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会(於:国立国会図書館)
	21日	アメリカ議会図書館Leeアジア部長来館
	26日	近畿地区国立大学図書館協議会事務部課長会議(於:京大)
9月1日		法人化後のILL複写料金決済処理に関する地区連絡館対象説明会(於:東大)
11日		第1回附属図書館商議会図書館政策委員会
12日		法人化後のILL文献複写等料金相殺サービス地区説明会(AVホール)
17日		図書系事務連絡会議
19日		平成15年度第2回図書館共同事業検討委員会(於:キャンパスプラザ京都)
10月1日		新規採用者辞令交付
3日		NII大学図書館等関連事業説明会(於:キャンパスプラザ京都)
		平成15年度国立七大学附属図書館協議会(於:東大)
		平成15年度国立七大学附属図書館長会議
		平成15年度国立七大学事務部長会議
7日		平成15年度留学生のための図書館ツアー
8日		国立国会図書館司書監来館
10日		情報公開法に対応した図書館利用規程改正説明会
		法人化に向けての図書業務検討委員会
14日		10月1日付け新規採用図書系職員初任者研修(~17日)
22日		法人化後の収書業務に関する説明会(AVホール)

## 目 次

電子ジャーナルの利用について	1
新規導入データベース、電子ジャーナルのお知らせ	6
附属図書館谷村文庫蔵『勅修百丈清規』元刊本・五山版	7
京都大学の歴史を語る資料群とその保存	12
「工学研究科化学系図書室」誕生の記	14
桂キャンパス移転と電気系図書室	16
教官著作寄贈図書一覧(平成15年9月~12月)	17
企画展の舞台裏	18
「宇治キャンパス公開2003」に附属図書館宇治分館が参加	20
「京都大学における今後の図書館」	21
図書館の動き	22

### 編集後記

この号がお手元に届く頃は新年の気持ちも新たに勉学に研究に仕事にと打ち込んでおられることでしょう。平成16年は京都大学もいよいよ法人として荒波に乗り出す年です。図書館もさまざまな課題と困難を抱えつつも、全学の支援を受けながら新しい方向を切り開いていく決意です。利用者の皆さまの役に立つ図書館を目指して。(C)



